

# ドイツにおける「赤ちゃんポスト」の地平

柏木 恭典

## The horizon of Babyklappe in Germany

Yasunori KASHIWAGI

### Abstract

The purpose of this paper is to describe the horizon of Babyklappe in Germany and to find out how Babyklappe developed in Germany. In Japan there is still only one Babyklappe in Kumamoto though many babies are entrusted to Babyklappe. Why does not Babyklappe spread in Japan? Where is the cause of this phenomenon? Babyklappe belongs to "Findelbaby Project". First of all, we should understand what this project is in order to discuss about Babyklappe more deeply. In addition, this paper describes the function of Babyklappe based on this project. Finally, this paper discusses the present issue of Babyklappe.

### Key-words

Babyklappe, SterniPark, Anonyme Geburt, Anonyme Abgabe, Persönliche Übergabe

## 1 はじめに

いわゆる「赤ちゃんポスト」は、ドイツの Babyklappe (Baby + Klappe の複合語) を手本として作られたものである。ドイツでは、2000年に初の赤ちゃんポストが誕生して以来、2008年の時点で、既に90か所以上の Babyklappe がドイツ全土に設置されている。2007年までの間に赤ちゃんポストに預けられた子どもの数は、推定で100人から200人といわれている。ズィンガー (Mirjam-Beate Singer) の研究では、2000年～2006年で、計58人の赤ちゃんが預けられているとされているが、これはアンケートによって表に出た数値であって、ズィンガー自身も、この58人という数値が、赤ちゃんポストに預けられた赤ちゃんの数ではないということを指摘している (M.B.Singer, 2008)。匿名性を重視しており、また民間組織による運営なので、正確な数値は明らかにならないというのが現状である。いずれにせよ、これまでのデータに従う限り、100～200人の子どもが預けられている、としかいいようがない。

他方、日本では、2007年運用開始から2010年3月までの間に、計57人が熊本市の慈恵病院内に設置された「このとりのゆりかご」に預けられている (読売新聞、2011年1月6日)。08年度に預けられた子どもの数は25人、

その25人のうちで身元が判明した子どもの数は22人、その22人のうちで親に引き取られた子どもの数は3人だった。09年度に預けられた子どもの数は15人、その15人のうちで身元が判明した子どもの数は14人、その15人のうちで生後1年未満の赤ちゃんの数は13人だった。それにもかかわらず、現在もなお赤ちゃんポストの数は1か所だけに留まっている。上のドイツの事情を踏まえても、この57人という数は決して少なくはないはずである。また、各メディアも、このことをセンセーショナルに取り上げた。今では、ほとんどの日本人がその名を認知しているほどである。それにもかかわらず、日本では、赤ちゃんポストは普及しなかった。なぜ、赤ちゃんポストは日本で広まらなかったのか。いや、広まらないのか。その原因はどこにあるのか。そのことを明らかにするためにも、今一度、赤ちゃんポストの雛型である Babyklappe 発祥のドイツに目を向ける必要がある。日本においても、母親による児童遺棄や児童殺害は、日々生じている。なぜ日本では赤ちゃんポストへの道が拓かれないのか。

そこで、本論では、ドイツの赤ちゃんポストの背景に焦点を当てて、「匿名出産」や「個別の引き渡し」を含め、母子救済をめざす「捨て子プロジェクト」の全

容を明らかにすることを目的としたい。この解明を通じて、一般に言われているような「子どもを捨てる場所」ではなく、「母子を守る新たな試みの一つ」として、赤ちゃんポストをドイツの文脈に即して位置づけようと思う。赤ちゃんポストというセンセーショナルな装置の背景には、母子を守ろうとする現代ドイツ人たちの知恵と努力があった。とりわけ、このプロジェクトは、国家主導ではなく、民間主導で展開されてきた、ということが非常に重要である。母子救済を民間人の立場から静かにゆっくりと展開してきたこのプロジェクトの背景には、ドイツならではの実践哲学がある。この点についても、最後に論じたい。

なお、本論では、ドイツの赤ちゃんポストのことを、「Babyklappe」と表記しているが、ドイツには様々な名称があり、すべての赤ちゃんポストがBabyklappeと表記されているわけではない。スイスではBabyfensterと呼ばれたり、オーストリアではBabynestと呼ばれたりしていることも付記しておく。同じドイツ語圏においても、その名称は様々である。

### 第一節 「捨て子プロジェクト」の一部としての赤ちゃんポスト—その全体的地平

あまりよく知られていないが、ドイツの「赤ちゃんポスト」は、それ自体単独で存在しているわけではない。赤ちゃんポストは、20世紀末に端を発する新たな母子救済システム全体の一部として機能しており、その全体が掲げる理念の下で運用されている。この点をきちんと理解しておかなければ、赤ちゃんポストのねらいが理解されぬまま、「子捨て箱だ」と批判されることになるだろう—そして、現にそう批判されてきた。

そこで本節では、ドイツで考案されたこの新しい母子救済プロジェクトの全体像を把握し、そして、その全体的な地平の中の赤ちゃんポストという視点を得ていきたい。なお、本論で念頭に置いているのは、有名なアムベルクの「モーゼ・プロジェクト (Moses-Projekt)」と、ハンブルクの「フィンデルベイビープロジェクト (Findelbaby-Projekt)」の二つである。どちらも2000年に企画されたプロジェクトである。この両者こそ、ドイツ中に赤ちゃんポストを広めた二大プロジェクトであった。なお、この両者はどちらも独立して行われたものであり、偶然の一致と考えてよさそうである。このプロジェクトの主な内容は以下の通りである。

#### <母子救済プロジェクト>

- 24時間ホットライン
- 匿名出産 (Anonyme Geburt)
- 匿名の預け入れ (Anonyme Abgabe)
- 個別の引き渡し (Persönliche Übergabe)
- 母子生活支援施設事業

第一に、まずもってドイツの母子救済プロジェクトが求めたのは、「24時間ホットライン」であった。つまり、「緊急下の女性たち (Frauen in Not)」のための緊急連絡先となる電話番号の確保と公開であった。これは、緊急下の女性たちとのパイプラインを作るために欠かせないものである。事実、現在のところ、Babyklappeの公式ホームページを閲覧すると、どのサイトにもその緊急連絡先が公開されている。このホットラインでは、匿名のまま、相談をすることができ、匿名のままで適切な支援を受けるための方法や手段を知ることができる。なお、Frauen in Notは、「緊急の状態、困窮の状態、貧苦の状態、苦しみのある女性たち」といった意味であり、色々な意味で捉えられる広義的な概念である。

第二に、ドイツの母子救済プロジェクトが強く求めたのが、「匿名出産」であった。これは、匿名のまま病院での分娩を実現しようという試みであり、ヨーロッパ各地で実現されつつあるものである—とりわけフランスにおいてこの匿名出産は広く知れわたっている—。通常の分娩や出産に関しては、日本においても、母の健康保険証や母子手帳が必要となり、また出産後にはその出産した赤ちゃんを自らの戸籍に入れなければならない。当然、出産した日にちや母に関する情報も病院に残る。ゆえに、身元を他人に知られたくないという女性の場合、彼女らは、病院での出産を意識的にせよ無意識的にせよ回避しようとする。出産直後の児童遺棄・児童殺害においては、こうした感情的な背景を抱えている場合が多い。出産後に児童遺棄しようとする母親の心理を考慮すると、子どものみならず、妊婦の救済という意味でも、匿名出産は非常に重要となる。とりわけ、匿名出産を求める声の背景にある妊婦の母体への配慮は、極めて重要な意味をもつ—この点については、次節において詳しく論じることになる—。自分の身元を人に知られたくない妊婦は、精神衛生的にも大きな負担やストレスを抱えていることが多い。

こうした負担やストレスに加え、帝王切開や吸引分娩や鉗子分娩など、特別な治療を必要とする出産となる可能性もある (Singer, 2008)。実際に、匿名出産はどこでどのような団体によってどのように行われたのだろうか。2000年09月に、ズルツバッハ・ローゼンベルクにてドイツ初の「匿名出産」が行なわれている。また、同年12月ハンブルクのフレンスブルクにて「匿名出産」が行なわれている。実施者は「赤ちゃんポスト」を世に広めたSterniParkであった。また、ズィンガーによれば、母子の生命保護に加え、匿名出産には、二つのチャンスがある。その一つは、匿名の出産が中絶（堕胎）の回避につながるという点であり、もう一つは、妊婦と何度もコンタクトをとることで、さらなる支援・相談・ケアを提供することができるようになるという点である (Singer, 2008)。

第三に、Babyklappe、すなわち、いわゆる赤ちゃんポストである。ただし、母子救済システムとして重要なのは、実はBabyklappeという概念よりも、そのBabyklappeへの「匿名の預け入れ」という概念であることはあまり知られていない。この匿名の預け入れこそが、母子救済プロジェクトの実施者にとって欠かせない概念なのである。実際、モーゼ・プロジェクトにおいても、「遺棄の代わりに預け入れを (Abgeben statt aussetzen)」というスローガンが掲げられている<sup>1</sup>。このことから分かるように、緊急下の女性たちから一時的に新生児を預かることが、この取り組みの根本的なねらいである。「緊急下の女性が出産した赤ちゃんを一時的に保護し、預かるということが、Babyklappeの本質的な機能である」、ということは忘れてはならない。

第四に、Babyklappeに預けられた赤ちゃんの「個別の引き渡し」である。この個別の引き渡しという概念は、上の「匿名の預け入れ」と相互に補完しあうものであり、どちらが欠けても成立しないようなものである。一時的に保護し、預かった赤ちゃんを実の母親に安全に確実に引き渡すことが、このプロジェクトの根本的な目的であり、ねらいである。次節で詳しく論じるが、たいていの場合、8週間程度で、匿名の預け入れを行なった女性は、自身の問題を自ら解決する。その間のみ、匿名の赤ちゃんを預かり、匿名のまま一

いしは匿名性を破棄して一赤ちゃんを引き渡すのである。もちろん、必要があれば、その後の相談にのることも可能であるし、母子の支援を継続することもできる。

そして、第五に、母子生活支援施設事業との連携である。捨て子プロジェクトを独自に展開するSterniParkでは、現在、母子生活支援事業に力を注いでいる。第四のプロジェクトとも関連するが、赤ちゃんポストを設置して分かったことは、赤ちゃんを預かるだけでは問題の根本的な解決には至らない、子どもと共に女性も継続的に支援しなければならない、ということであった。事実、SterniParkは、幼稚園事業から出発し、Babyklappeを経て、母子生活支援事業へと向かっている (柏木, 2010)。

ドイツでは、常にこれら全体の中で、赤ちゃんポストを考えている。ドイツにおいても、赤ちゃんポストという画期的な近代装置がセンセーショナルに報じられたが、これはあくまでも「母子救済プロジェクト」の全体の一部でしかない。これは、ドイツ国内のみならず、近隣諸国においても同様であり、この全体的なパースペクティブから、赤ちゃんポストは考えられなければならない。また、こうしたプロジェクトが、国家主導によるものではなく、幼稚園を運営する団体やキリスト教系団体によって導かれてきた、という点にも目を向けなければならない。

## 第二節 愛と現代テクノロジーの融合システムとしての赤ちゃんポスト

では、女性救済プロジェクトの一つである赤ちゃんポストは、こうした全体の中で、実際にどのように使用され、どのように機能しているのだろうか。本節では、前節の考察を踏まえつつ、赤ちゃんポストを、「愛と現代テクノロジーの融合システム」と見立てて、さらに論じていくことにする。これは、筆者自身が直接ドイツ、オーストリアの赤ちゃんポストを実際にみたときの印象でもあり、また、事実そうした二律背反的な独特なシステムとなっていることに基づいている。赤ちゃんポストは、新生児とその母親への人道主義的・キリスト教的博愛主義的な愛に基づきながらも、

1 <http://www.moses-projekt.de/html/informationen.html>

そのシステムそのものは現代テクノロジーを駆使したものなのである。

そこで、ここでは、前節の全体的なパースペクティブから、具体的な赤ちゃんポスト実践の全体を、実践者の視点から読み解いていくことにしよう。

赤ちゃんポストをドイツ国内に初めて設置したのは、SterniParkという団体であった（柏木、2008）。そのSterniParkで打ち出した『捨て子プロジェクト』の主任（当時）、ハイディ・ローゼンフェルト（Heidi Rosenfeld）は、赤ちゃんポスト開設5年目の2005年4月12日に、次のように回想している<sup>2</sup>。

5年前に赤ちゃんポストを設置した時、私たちは、「もし来年のいつか、一人の子どもだけでも預けられるとしたら、すでに赤ちゃんポストの意味はあった」、と言いました。それから5年後の今、この赤ちゃんポストがかつてよりもよりその意味を増してきた、ということは周知のこととします。ここゲート通りの赤ちゃんポストだけを見ても、2000年4月以来、実に19人の子どもたちが預けられてきました。また、直接母親たちとお会いし、さらに3人の子どもがわたしたちに託されました。ウィルヘルムブルクにもわたしたちの赤ちゃんポストがありますが、そこも三度ほど利用されました。合計25人の赤ちゃんが救われました。<sup>3</sup>

この回想から分かるように、赤ちゃんポストの意義は、母から子どもを預かるということであった。しかし、なぜローゼンフェルトは赤ちゃんポストという装置を設置しようと考えたのだろうか。そこにどんな背景があり、どのような思いがあり、どのようなきっかけで赤ちゃんポストを設置したのだろうか。ローゼンフェルトは、「…1999年、ハンブルクでは、1年間で、3人の乳児が遺体となって発見されました。赤ちゃんポストが設置されてからのこの5年間でも、残念ながらやはり遺体となって発見された乳児が3人いますが、1年間ではなく5年の間に3人です。統計的には、80%

の減少ということになります」、と説明している。この言葉が示す通り、ハンブルク市内で起こった児童遺棄事件が直接的なきっかけであったのである。日本においても、同様に、似たような児童遺棄は多くの場所で生じている。児童虐待への関心から、日本でも連日のように遺棄による児童殺害のニュースが報道されている。ドイツにおいても、同じように、児童遺棄・児童殺害に対する問題関心から赤ちゃんポストが生まれた、ということである。

では、具体的に赤ちゃんポストとはどのような装置なのだろうか。ローゼンフェルトは次のように説明する。

…わたしたちの最初の赤ちゃんポストは、ゲート通り27番地にある建物の中にあります。高さ30センチ、横72センチの鋼鉄製の開閉式の扉があり、その奥に、常時37℃に保たれた温かい小さなベッドがあります。新生児を預けたいと思っている母親はその扉を開き、赤ちゃんをそのベッドに寝かせて、利用書を持って帰ります。母親が望むならば、その赤ちゃんの指紋や足紋を取ります。扉は一度閉じられると、再び開けることはできません。ベッドに向けたビデオカメラを通じて、救護機関（Wachdienst）に伝達されます。そして、その後には援機関（Hintergrunddienst）に伝達されるのです。愛情深く赤ちゃんを出迎え、その子のあらゆることをさらに取り計らうために、救護機関は赤ちゃんポストからわずか数分のところにあります。母親には、自分の判断をふりかえり、自分の子へと向かう一つの道を見出すための8週間の期間が用意されています。この期間、赤ちゃんは、愛情のある養護家族に預けられます。<sup>4</sup>

赤ちゃんポストについて語る際、「常時37℃に保たれた温かい小さなベッド」、「ビデオカメラ」は欠かすことができない。電子レンジの扉のような開閉口があり、その扉は、閉じた後、3分で自動ロックがかかるようになっている。上の記述にもあるが、扉の大きさは、30cm×72cmであり、赤ちゃんが一人入れるかどうかのサイ

2 [http://www.sternipark.de/geschaefte/pdf/sternipark\\_5jahre\\_babyklappe\\_heidi\\_rosenfeld.pdf](http://www.sternipark.de/geschaefte/pdf/sternipark_5jahre_babyklappe_heidi_rosenfeld.pdf) ただし、2011年1月時点で、ローゼンフェルトの文章は削除されている。筆者は、公開されていた文書を保存し、これを翻訳した。現在、ローゼンフェルトがSterniParkに所属しているのかどうかは不明である。だが、たしかにローゼンフェルトは、SterniParkのプロジェクトリーダーであった。その根拠は以下に見出せる。[http://extranet.medical-tribune.de/volltext/PDF/2002/MT\\_Deutschland/14\\_mtd/MTD\\_14\\_S20.pdf](http://extranet.medical-tribune.de/volltext/PDF/2002/MT_Deutschland/14_mtd/MTD_14_S20.pdf)

3 Heidi Rosenfeld, Ebd.

4 Ebd.

ズである。ビデオカメラは、赤ちゃんポストの内部だけに向けられており、赤ちゃんが赤ちゃんポストに預けられる様子が記録される。この様子は、非常に機械的で、システマティックである。「緊急下の女性が生んだ赤ちゃんを救う」というヒューマニズム—ないしはキリスト教的博愛主義—とは裏腹に、非常に冷静で合理的で近代的なシステムになっているのである。もう一か所、別の赤ちゃんポストの機能の仕方についてみておこう。

私たちはあなたを支援します。あなたも力を貸してください！ 手順は以下の通りです。聖ヨハネス病院内のBabyklappeに向かう標識に従ってください。駐車場に車を止めてください。そこからBabyklappeまでは100歩ほどです。最初にBabyklappeのスイッチを押して、ふたを開けてください。そうしたら、自分のお子さんをその中に置いてください。このBabyklappeには、母親宛の手紙が置いてあります。この手紙は、あなたが後に子どもを返してもらいたいと思うときに、母親の証明書となります。あなたは、子どもの名前を備え付けの用紙に書き残すことができます。ペンは用意してあります。ベッドは、新生児にとってちょうど良い温度の37度に温められています。30秒後に、Babyklappeは完全にロックされます。もう誰も中にいる赤ちゃんを外に連れ出すことはできません。2分後、集中治療室と病院入り口のシグナルが点灯します。ビデオカメラも2分後に起動し始めます。看護師が赤ちゃんを抱えて、最初の診察にあたります。このこと自体、あなたは母親として、助けを求めつつ、お子さんを預けた、ということなのです。したがって、誰もあなたを批難することはありません。あなたは自分のお子さんの養育の猶予を得たのです。Babyklappeは人生の一つの決定なのです。<sup>5</sup>

ドイツ国内外問わず、赤ちゃんポストのシステムはほぼ上記のものと同様であると考えてよいだろう。また、いずれの赤ちゃんポストにも共通しているのは、赤ちゃんを預けた母親と子どもの関係をきちんと明白にしようとしている点である。預かった赤ちゃんを、

ちゃんと預けた母親に引き渡す、というのがこの赤ちゃんポストの使命ともいえる。そのため、実の赤ちゃんを正確に実の母親に引き渡せるように、指紋や足紋をとること、母親にきちんと赤ちゃんポストの機能を説明する母親への手紙を置いておくことなど、細かい配慮がなされている。

スイスの赤ちゃんポストでは、この母親の手紙がインターネット上で公開されている。その手紙には、以下のような内容が書かれている<sup>6</sup>。

親愛なるお母様へ (Liebe Mutter) <sup>7</sup>

あなたはご自分のお子さんをアインジーデルンのBabyfensterに預けました<sup>8</sup>。あなたは、お子さんが幸せに生きるための新しいチャンスをお子さんに与えたのです。このことを、私たちは心から感謝致します！ …

…スイス母子支援財団…は、あなたとお子さんのよき将来を実現できるよう、あなたに財政支援や社会的支援を提供します。よろしければ、もちろん匿名で構いませんので、ご相談ください。私たちはいつでもあなたのためにいます！ アインジーデルン市立病院、SHMK財団、アインジーデルン市の後見課、どちらでもかまいませんので、どうぞお申し出ください。あなたのお申し出は、厳格に、かつ内密に扱います。当然、あなたは匿名のままでかまいません。

お子さんと一緒に、お子さんの名前を書いた紙を添えてください。また、よろしければ、封をした封筒の中にお子さんの出生に関する情報を入れて残しておいてください。それらは、お子さんにとっても有益となることでしょう。こうした手紙は、後から届けることもできます。もしご希望であれば、あなたからの手紙は、アインジーデルンの後見課が保管し、お子さんが成人になった後に、お子さんにお渡し致します。…

この手紙からも窺えるように、実の母と実の子を結

5 ドウイスブルクカトリック病院のパンフレットより

6 拙論文『「赤ちゃんポスト」とコミュニティ—にて、全文掲載しているので、今回は必要な箇所のみ部分的な引用に留めておいた。

7 [http://www.babyfenster.ch/pics/Babyfenster\\_Brief\\_an\\_die\\_Mutter.pdf](http://www.babyfenster.ch/pics/Babyfenster_Brief_an_die_Mutter.pdf)

8 スイスではBabyklappeではなくBabyfensterと表記される

びつけようとする配慮がきちんとされている。孤立する母親への気遣いもあり、また子どもに関する情報も求めている。たとえ母親が再び実の赤ちゃんを引き取りにこなくても、母親との結びつきを残してもらえようと、情報の提示を求めているのである。それは、母子共に与えられる「チャンス」である。赤ちゃんポストは、児童遺棄を助長させるものだという批判もあり、暗いイメージが付きまとうが、実際の赤ちゃんポストは希望と肯定感情で満ち溢れている。

また、赤ちゃんポストを語る際に重要なことは、単に母子を救済するという人道主義的な精神だけではない。それだけでなく、一つの民間のVerein（NPOに準ずるもの）のプロジェクトでありながら、上記したように、安全で、確実で、完璧な支援体制を整えたということである。直接的には、中世の「ターンテーブル」（修道院内に設置された子捨て箱）から影響を受けたわけではないにしても、現時点において、児童救済の長い歴史の中で考え抜かれた最も高度な児童救済システムといえるだろう（柏木、2011）。日本では、辛辣な赤ちゃんポスト批判があったが、それらには、中世から脈々と続くヨーロッパの民間人たちの自由意思に基づく児童救済活動の理解がすっぽりと抜け落ちているようにも思われる。

赤ちゃんポストは、赤ちゃんを無事に保護することが目ざされているが、それと同時に、母親の救済という視点も反映されている、ということも忘れてはならない。預かり期間である8週間に、母親は自分の問題を解決させ、必ず再び我が子を引き取りにやってくる。いや、引き取りに戻ってくることを赤ちゃんポストの設置者や運営者たちは信じているのである。

わたしたちは、「自分の子どもを赤ちゃんポストに預けた母親は、8週間の間に自分の考えを改める」、ということを目のあたりにしてきました。これまで合計7人の子どもたちが、再び自分の母親のところに戻りました。…他の子どもたちは、新たな養父母に引き取られました。一人だけ、例外的なケースがありました。ロッタです。彼女は、脳に先天性の重度の損傷を受けていました。しかし、母親に引き渡す時点で、母親はそのことに気づいていませんでした。

もう一人います。ラスムスです。彼は、生まれた時に、手術で摘出せねばならない小さなイボがありました。彼は今、とても健康な子どもです。他の赤ちゃんポストに置かれた子どもたちは健康でしっかりと育っていました。母親となる女性が安心して出産できることを願って、私たちは赤ちゃんポストの道を歩んでいる、ということを理解していただきたいのです。これが、われわれが病院施設で匿名出産（Anonyme Geburt）を行い、そして後に赤ちゃんポストを設置する病院が増えた理由の一つなのです。

この上の記述からも、赤ちゃんポストが単に子どもを預かるということだけでなく、母親、とりわけ母体を配慮している、ということが確認できるだろう。この点については、ズィンガーも、「すべての出産の10～30%で、様々な合併症（Komplikationen）が起こっており、誰にも知らせずに家で出産することのリスクは、母子共に、極めて高い」と述べており<sup>9</sup>、赤ちゃんポストの意義を母体のケアに見出している。合併症のリスクは、妊婦のストレスやサポートの欠如などによって高まるとして、彼女は、「強いストレスによる重圧と社会的サポートの乏しさの二つは、自分の妊娠を隠し、ごまかそうとする女性たちにぴったりと当てはまる」と結論づけている<sup>10</sup>。

以上のことから、「女性が安心して出産できること」を実現するために、赤ちゃんポストが存在している、といえるだろう。実際、児童遺棄や児童殺害の道を歩んでしまう女性は、われわれの想像を絶する状況を生きている。「出産」という人間の人生において最も幸福であるはずの営みを、絶望的な状況の中で行なわなければならない女性もいるということは決して忘れてはならないはずである。この点についても、ローゼンフェルトは言及している。

…こうした母親の問題をよりよく理解してもらうために、もう一つ付け加えて述べておきたいことがあります。昨年、自分の子どもを死なせてしまったハンブルクの女性がいきました。この事件の後、私はこの女性の支援を行いました。彼女は罰せられました。しかし、裁判所は、彼女の刑の判決の際に、「彼女自身が緊急下にあった」、ということを確認

9 Singer, S.47

10 Ebd.

めたのです。現在、彼女は健康な一児の良き母として生きています。その当時は時期が悪かったのです。そして、彼女を取り巻く状況が悪かったのです。

当たり前のことかもしれないが、すべての女性がよい環境の中で出産するわけではない。中には、望まない出産、あるいは、周囲の人々の冷たいまなざしの中での出産、あるいは、自分自身が最も望まない出産もある。彼女の言葉でいえば、「取り巻く環境の悪さ」ゆえに、追いつめられる女性も少なからずいるのである。そうした女性に対しては、国家的な支援は極めて脆弱である。この点にするべくメスを入れるのが、赤ちゃんポストの取り組みである、と理解することができよう。

それは、設置主体を考えることで、いっそう理解が深まるであろう。赤ちゃんポストの設置主体は、国家でも地方自治体でもない。そうではなく、地域団体(Verein)、カトリック女性協会(SfK e.V)、母子支援施設、病院等、地域の民間団体、民間組織なのである。「匿名性」を保障するという原則も、やはり国や地方自治体といった公共事業には馴染まないものである。当然、国や地方自治体の支援を受けること自体に対して批判することはないが、取り組もうとしていることが、極めて個人レベルのことであり、極めてデリケートな問題であり、法秩序を侵さないまでも超える問題をうちに含んでいることは間違いない。

では、実際の運営費用はどうなっているのだろうか。ローゼンフェルトによれば、SterniParkの場合、開設した2000年から市からの助成金を受けていたということだが、2003年以降は、助成金なしで運営しているということであった。

…2000年から2002年まで、このプロジェクトは、ハンブルク市から助成を受けていました。当初は年間5万マルクの助成金でしたが、その後、4万ユーロにまで増えました。2003年以降は、完全に寄付金[義援金]で経営していかなければなりません。明らかに人間の命を守ってきたし、今も守り続けているこの施設が、なぜ支援を受けられないのでしょうか。私には理解できません。いずれにせよ、わ

れわれは、赤ちゃんポスト創設以前、ハンブルクで度々発見されたひどく恐ろしい発見物遺棄児の亡骸をハンブルクの警察官や消防士に発見させないように努めてきたのです。<sup>11</sup> ([ ]内筆者)

このローゼンフェルトの言葉から、市から助成金を得ることの難しさが浮かび上がってくる。「なぜ支援を受けられないのでしょうか」という彼女の言葉には、現実と理想のギャップがあることを窺わせる。母子救済プロジェクトは、国や地方自治体に対して、助成金を求めているわけではない。しかし、現実的には助成金はなかなか得にくいのが、ドイツの現状であるといわざるを得ない。赤ちゃんポストを設置している病院、社会福祉施設、幼稚園、母子支援施設、いずれの場所においても、助成金を期待しつつも、実際には助成金を得られないまま、赤ちゃんポスト事業を展開していると考えてよさそうである。

### 第三節 預けられた赤ちゃんの引き渡しと養子縁組について

前節では、主に赤ちゃんポストの実際の機能と現状について論じてきた。本節では、赤ちゃんポストに預けられた赤ちゃんが、その後、どのように処遇され、どのようにして実の母親のもとに引き渡されるのかについて、可能な限り詳しく論じていくことにしたい。

既に述べたように、すべての赤ちゃんポストないしは母子救済プロジェクトの実施者は、赤ちゃんの「匿名の預け入れ」と「匿名の引き渡し」の両方を想定している。日本では、「預け入れ」ばかりが話題となっており、「引き渡し」が全く議論されてこなかったが、ドイツの赤ちゃんポストの議論を踏まえると、「引き渡し」は絶対に無視することのできない要素であることが分かるだろう。

赤ちゃんが預けられた後、最も重要となるのが、第一節でも述べた「24時間ホットライン」である。スタッフは、母親からの連絡を待つ。赤ちゃんは、その地域のボランティアの養父母のもとに預けられる。母親からの連絡が入ると、スタッフが、母親との面会の場所と時間を取り決める。基本的には、母親のいる場所の

11 Heidi Rosenfeld, Ebd.

周辺にスタッフが出向く、というケースが多い。スタッフの車で、数人が一チームで取り決められた場所に向かう（柏木、2010）。まずもって重要なことは、母親の「匿名性」を遵守しながら、その母親と接触する、ということである。そして、母親との対話・支援・相談のきっかけをつくるということである。母親が子どもを育てられないと判断したら、スタッフは、養子縁組の手続きを始めたり、母子生活支援施設への入所を薦めたりする。母親が子どもを引き取ることを希望したら、母親がきちんと子どもの養育ができるように、相談援助や必要な支援を行ったりする。いずれにしても、母親との関係を保ち、後の母子が共に健全に生活できるように配慮するのである。

ここで、ドイツの養子縁組について概観しておこう。統計的にみると、この数年間、ドイツの養子縁組の数は減少している。2001年、ドイツでは合計5909人の子どもが養子となっている。そのうち、4120人（全体の約70%）の子どもたちがドイツ国籍を取得している。外国籍を取得した子どもは1789人だったが、その約半分弱（48%）の子どもが、養子縁組の際に、養父母の母国へと連れていかれた。5909人の養子の中で該当する外国養子（Fremdadoptionen）は、2226人であった。それ以外の3683人の子どもたちは親戚や義理の両親に引き取られている。養子による養護の始まりにおける家族状況に関しては、次の通りである。2776のケース（47%）で、手放した親又は養育権をもつ親は独身だった。養子として預けた405人は結婚していて同居している両親だった。154人は結婚しているが別居中の両親だった。また、養子として受け入れた2034人の親が離婚していた。未亡人は236人だった。89人の子どもが孤児（Waisen）であった。215人の子どもの家族状況は不明であった。肉親の大部分（93%）が承諾説明書で自分の子どもの養子委譲に自ら同意している。司法上、424件の同意表明書が取り交わされた。その197件（46%）が未婚の親／未婚の母だった（kuhn,2005:94-95）。

#### 第四節 赤ちゃんポストと生命保護の倫理—そして、その今日的課題

タウベル（Alexander Taubel）も指摘しているように、

「赤ちゃんポストと匿名の出産は、ドイツにおいてこれまで基準として定められていない」（Taubel, 2009:25）。この言葉が示すように、2009年の時点で、赤ちゃんポストも匿名出産も、未だ法的に整えられているわけではなく、法的根拠はない。にもかかわらず、ドイツ各地に既に90の赤ちゃんポストが存在するのはいったいなぜなのだろうか。なぜ、これほど多くの赤ちゃんポストがドイツや近隣諸国で設置されるに至ったのだろうか。この問いは、本論文の域をはるかに超える問いであり、赤ちゃんポストの根源にかかわる問題である。本節では、先行研究を踏まえながら、このプロジェクトの今日的課題として簡素に論じていくことにしたい。

クーン（Sonja Kuhn）によれば、「設置者と支持者たちは、最初から、赤ちゃんポストの設置を生命保護の思想と結びつけていた」<sup>12</sup>。つまり、赤ちゃんポストの広まりは、生命保護の倫理と密接に関連し合っていたのである。児童遺棄と児童殺害という人類史上ずっと未解決のままであったあまりに大きすぎる課題への再挑戦といってもよいかもしれない。クーンも、「赤ちゃんポストは乳児の遺棄と殺害に対する答えを出さなければならない」、と訴えている<sup>13</sup>。

赤ちゃんポストは、常時実施される支援システムではなく、その補完的役割を果たそうとしている。事実、ズィンガーの研究によれば、これまで一度も赤ちゃんが預けられていない赤ちゃんポストの数は、アンケート回答の実に34%もあったのだ。赤ちゃんポストを設置しても、常に赤ちゃんが預けられるわけではなく、年に一人、ないしは二人の赤ちゃんが預けられるというのが、ドイツの赤ちゃんポストの傾向である。ゆえに、常時、誰かが赤ちゃんポストのために待機しなければならないわけではなく、緊急時に誰かが補完的にサポートするだけでよいとされるのである。幼稚園や病院や母子生活支援施設に隣接して赤ちゃんポストが設置される場合がほとんどであり、24時間誰かがいる場所であれば、赤ちゃんポストは設置可能なのである。ここで、2008年に筆者が行ったSterniParkが運営する赤ちゃんポストの設置場所にある幼稚園教諭とのインタビューを挙げておきたい。実際には、この幼稚園教諭が、いざというときの対応する人となっている。赤ちゃん

12 Kuhn, S.123

13 Ebd.



ポストに対して、どのように思っているのだろうか。  
(○は筆者、●は幼稚園教諭)

○こちらの幼稚園には何人の子どもがいますか？

●ここには、150人の子どもがいます。

○そんなに多くの子どもがいますか？

●そうですよ。しかも、来年のリストでは、さらに200人の待機児童がいます。だから、今、この施設を新たに拡大しているところなのです。

○あなたは幼稚園の教諭として働いているのですよね？何年間、学生として勉強したのですか？

●4年間です。その後、英語を話す幼稚園で幼稚園教諭として働き始めました。2年間です。そして、その後こちらの幼稚園にきて、主任をしています。こちらのユリアーネさんが私の補助教諭です。私たち二人です。この大きなフロアを二人で担当しています。

○あなたが学生だった頃、Babyklappeについて知っていましたか？

●いいえ、いいえ。私がここで働き始めて、初めてBabyklappeを知りました。それまで全然知りませんでした。

○知った時、どう思いましたか？

●どう思ったか？ うーん、私は良いと思いましたよ。というのも、ここに来る子どもたちは、もしBabyklappeがなかったら、お母さんにどうされていたか、分からないでしょう。それに、ここに赤ちゃんを預けることができれば、その後、お母さんたちはじっくり考えることができます。Babyklappに子どもを預けてよかったのかって。また、自分の子どもをここに預けたお母さんたちは、もしかしたら別の場所に子どもを置き去りにしていたかもしれない。ゴミ捨て場かもしれないし、もしかしたら死んでしまうほどに凍える場所かもしれない。だから、ここがいいと思いますね。ここは部屋が暖かいでしょ。それに病院にも行けます。子どものことを救うあらゆることができます。だから、Babyklappeはよいと思っています。

○ありがとうございました。

このように、赤ちゃんポストに実際にかかわる人た

ちは、この赤ちゃんポストを非常にポジティブに捉えている。上の幼稚園教諭も、「生命保護の倫理」をきちんとわきまえているのみならず、母親への温かいまなざしも忘れていない。「ここに赤ちゃんを預けることができれば、その後、お母さんたちはじっくり考えることができます」という言葉に、赤ちゃんポストの意味が見てとれるだろう。母親に考える時間を与え、そして、母親がこれからどうするのかを決断するのを待つこと、それが赤ちゃんポストの意味なのである。

上述したクーンは、赤ちゃんポストの合法化問題に対して、二つの根拠を見いだそうとしている。赤ちゃんポスト設置の根拠の一つ目は、ドイツでは、年間の児童遺棄と児童殺害の数が合計約20～50人に達している、という事実である。だが、実際にはそれよりもはるかに多く、その40倍の数に達する潜在的数値が出されており、それを減らすことは最重要課題である、と主張する。そして、赤ちゃんポスト設置の根拠の二つ目は、「遺棄されたり殺されたりした新生児が、計画されている赤ちゃんポストやすでに設置された赤ちゃんポストと地理的に近い周囲で発見されている」<sup>14</sup>、という事実である。この二つの事実から、クーンは、「赤ちゃんポストの直接的な必要性が明白になった」、としている<sup>15</sup>。実際、SterniParkのあるハンブルクでは、児童遺棄や児童殺害が頻繁に勃発していた。赤ちゃんポストは、極めて現実的で実際的な人道的支援の具体的な方策だ、とクーンは主張しているのである。

とはいえ、赤ちゃんポストは、ドイツ国内外で大きな波紋を呼んでいる。第一に、匿名で子どもを預けた母親の行為は、養育・扶養義務の放棄にならないのかという問いである。匿名で赤ちゃんを預かるということは、そのまま母親が消え去っても、その母親は罪を負わないということである。赤ちゃんポストを合法化した場合、こうした親を法的に認めることにつながるのか。第二に、これも極めて悩ましい問いであるが、「母親の意思で預けたのか」、あるいは「第三者の意思で預けられたのか」という問いである。もし母親自身の意思で母親の手によって赤ちゃんが預けられたならば、それは、これまで述べてきたとおり、本来の赤ちゃんポストの意義に合致する。だが、もし母親以外

14 Ebd.,S.124

15 Ebd.

の第三者によって、赤ちゃんを赤ちゃんポストに置いてくるように指示されたり命令されたりしていた場合、その第三者を特定したり、罰したりすることは可能なのか。例えば、赤ちゃんの出産を望まない父親が、出産したばかりの母親に対して、強制的に捨てるように指示した場合、その父親に対して、何らかの罰を与えることができるのか、というケースもあり得ないとはいえない。第四に、「親を知る権利」と「生きる権利」という二律背反の問題をいかに解決するか、という問題である。本論で述べてきた母子救済プロジェクトが掲げる「匿名性」が保持されると、匿名で預けられた赤ちゃんは後に自分の親を知ることができない。第五に、赤ちゃんポストが児童殺害数を減らすことに役立っているかの根拠は、現在までのところ、厳密には出されていないという反論にどう答えるのか、という問題である。既に示したとおり、赤ちゃんポストの設置者たちは、児童遺棄や児童殺害をなくすために、赤ちゃんポストを含む母子救済プロジェクトを企図している。だが、このプロジェクトが実際に児童遺棄数や児童殺害数の減少に貢献しているのかどうかはまだはっきりとは分かっていないのである。こうした問題を克服しなければ、赤ちゃんポストの合法化は困難だといわざるを得ないのが現状だろう。赤ちゃんポストの合法化は、今なお、政治的に議論されているテーマなのである。

## 2 おわりに

本論は、2008年に執筆した『「赤ちゃんポスト」とコミュニティ』を発展的に補完する続編である。とりわけ、赤ちゃんポストの取り組みを、「母子救済プロジェクト」の全体から、捉えなおすというのが、今回の論文の大きな趣旨であった。その中でも、とりわけ「匿名出産」、「匿名の預け入れ」、「匿名の引き渡し」という鍵概念は、未だ日本では周知されていないものと思われる。だが、知らないではすまされない現実もある。2010年9月14日には、世田谷区のごみ収集車の中から生後間もない男児の遺体が見つかった。死体遺棄容疑で逮捕されたのは、18歳の女子高校生だった。同年9月24日には、水戸市で1歳くらいの女兒の遺体が遺棄された。25歳になる女兒の母親は行方不明だと報じられた。同年11月には、東京都北区で乳児の遺体が発見され、35歳の女性が死体遺棄容疑で逮捕された。2011年1月に

は、大阪府東大阪市の民家敷地内の汚水槽に、生まれたばかりの女兒の遺体が浮かんでいるのが発見されている。これは氷山の一角に過ぎない。日本にも、追いつめられた母子は今なおどこかに必ずいるのである。こうした事件の背後には、「緊急下の女性」という悲しい現実がある。もし彼女たちに8週間という時間が与えられていたならば、おそらくすべての展開が違っていただろう。

法的根拠がないから赤ちゃんポストが作れない、というレトリックではなく、法的根拠がなくとも、必要だから設置するというレトリックを、われわれは獲得することができるのだろうか。われわれがドイツから学ばなければならないのは、赤ちゃんポストのシステムではなく、まずもって母子を救おうとする市民の力なのではないだろうか。そして、そうした市民を形成するドイツの教育システムなのではないだろうか。

## 引用文献

- 柏木恭典 2008 「赤ちゃんポスト」とコミュニティ 大東文化大学人文科学研究所、第13号
- 柏木恭典 2010 世界初の「赤ちゃんポスト」を設置したSterniParkとの対話1 千葉経済大学短期大学部研究紀要第6号
- 柏木恭典・上野正道・藤井佳世・村山拓 2011 学校という対話空間 北大路書房
- Kuhn, Sonja 2005 *Babyklappe und anonyme Geburt*, MaroVerlag.
- Sieger, Mirjam-Beate 2008 *Babyklappen und anonyme Geburt*, Rabenstück Verlag.
- Swientek, Christine 2001 *Die Wiederentdeckung der Schande Babyklappen und anonyme Geburt*, Lambertus Verlag.
- Teubel, Alexander 2009 *Geboren und Weggegeben Rechtliche Analyse der Babyklappen und anonymen Geburt*, Duncker & Humblot・Berlin.
- Wiesner-Berg, Stephanie 2009 *Anonyme Kinderabgabe in Deutschland und der Schweiz*, Nomos Verlagsgesellschaft.